
魔法士の卵

篠原 千英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法士の卵

【Nコード】

N2675W

【作者名】

篠原 千英

【あらすじ】

第二次世界大戦から500年以上が経ち、魔法の存在が当然となつた世界。そこには魔法高校と呼ばれる魔法士の育成機関があった。魔法高校に今年入学した一人の少年を中心に物語は進んで行く。

1101 サボタージュ

現代において、社会に大きな影響を及ぼしている魔法。

この魔法が最初に表社会に姿を現したのは1939年の第二次世界大戦である。

核兵器にも劣らぬ強力な魔法が多く使用されたこの大戦は、勝利国・敗戦国問わず、甚大な被害を受けた。

大きな痛みを受けた各国は、1945年、国際連合の発足当初にこのような取り決めを発表した。

『魔法軍事使用禁止法』

どんなあらゆる事態に対しても、軍事目的で魔法を用いてはならない—というものである。

この法令が作られてから、魔法の使用による人の死亡数が激減した。

大戦での恐怖から、魔法の絶大な威力に畏怖の念を抱いていた世界各国では安堵の時代が流れ、少しずつであるが平和も取り戻されたきた。

大戦から500年以上経った今でも、魔法軍事使用禁止法は存在し、世界がまたあの悪夢のような事態にならないようにしている。

また、この長い年月の間で、人々の魔法に対する恐怖は徐々に薄れていった。

義務教育間には魔法の授業が義務付けられるようになり、今では魔法が生活のあらゆるところで使用されている。

しかしその反面で、魔法を使用する犯罪があとをたたない。

大戦のような悲劇をまた繰り返さないためにも、この犯罪をどう減らしていくかが我々の今後の課題ではないだろうか。

.....

「そのあなた、こんなところで何しているの？」

情報端末に表示されていた文章をそこまで読み、木陰のベンチに座っていた少年は前方から不意に声をかけられ、反射的に端末を閉じた。元々、暇を潰すために流し読みしていたのだ。特に問題は無い。

顔を上げると、そこにはとびつきりの美少女が立っていた。

長い黒髪を風になびかせているその少女は、ニツコリと少年に笑いかける。全ての男を魅了しそうなその笑顔に、少年の目は釘付けになっていた。しかし目には色めいたものはなく、ただただ少女を観察していた。

少女が身につけている制服は、東京魔法高等学校一年と同じ学校のものだ。赤いネクタイに紺のブレザーという、どこにでもありそうな制服だが、この美少女が着ると、それがどこか上品めいたように感じてしまう。

美少女は得な生き物だな、と少女の問いに返答せずにそんなことをボンヤリと考えていると、少女がまた口を開いた。

「今は入学式の真っ最中よ？」

少女の言う通り、今この瞬間には、ここー東京魔法高等学校の講堂で入学式が行われているはずだ。今年この学校に入学した少年は、本来ならば講堂にいなければならない。

なぜ少年は講堂ではなく校舎の裏のベンチにいるのか。それは、ただ単純に、少年がサボったからである。入学式を。

校長の話は長い。それは、どこの学校でも、どんな学校でも、いつの学校でも同じである。その話がつまらないことも。

だから少年は逃げ出したのだ。その話を聞いても意味がないと判断したから。

「そういうアンタはどうなんだ」

普通ならば、サボリが見つかった時点で少年の講堂行きは確定だ。しかし少年の口から出た言葉は、謝罪でも言い訳でもなかった。

「アンタも一年だろ」

魔法学校の制服の左胸には、国際魔法連合のエンブレムが刺繍されている。これは、世界で統一されているものだ。どんな格好の制服だろうと、このエンブレムがあれば、それ魔法学校の制服である。ちなみに、学年で統一されているエンブレムの色も世界共通だ。今の学年でいえば、一年が赤、二年が緑、三年が青である。

今、少年の目の前にいる少女の左胸のエンブレムの色は青。つまり、少年と同学年であることを示している。

年上の人間ならともかく同学年の、ましてや自分と同じく入学式に出ていない人間に言われる筋合いはない。少年はそう考えた。

すると少女は、

「ええ、そうよ。私はあなたと同じ一年生。それがどうかした？」

と、全く悪びれた風もなくそう言った。

「じゃあ、アンタもサボリか」

「人聞きの悪いことを言わないでほしいわね。私はただ休憩するために入学式を抜け出しただけよ？」

「それを世間ではサボリと言っただ。つうか早く座れよ。女の子にずっと立たれていると気が滅入る」

そう言っただけ少年はベンチの端に移動して、少女が座れるスペースを確保した。少女は薄く微笑み、少年が空けた場所に座った。

「ありがとう。紳士なのね」

「本当に紳士なヤツは、そもそも入学式を抜け出したりなんかしないだろうさ」

「それもそうね」

それから、少女は何も言わなくなり、そして目を閉じた。

少年も何も言わない。

無言のひと時が流れた。それは、会話に困った時の重い沈黙ではなく、温かい心安らぐ沈黙であった。

聞こえてくるのは鳥のさえずる声と、講堂から漏れてくるマイクの音だけ。今この空間には、二人の男女とその二つの音しか存在しなかった。

いつまでこうしていただろうか。それは一分間だったかもしれないし、十分間だったかもしれないし、あるいは一時間だったかもしれない。

しかし少年にはそんなことはどうでも良かった。ただ今は、この時間を大事にしたかった。

その時、穏やかな風が流れ、二人を包み込んだ。少女の長い黒髪がなびき、そして少女は、ゆっくりとまぶたを開いた。

「あなた、名前は？」

風に言葉を乗せるように、少女は少年には問いた。

少年は口を開き、答えた。

「1ー？、如月智也」

少年の返答は素っ気ないものだった。しかし、少女は気を悪くした風もなく、もう一度目を閉じた。それは、少年の名前を忘れないように記憶しようとしている風に見えた。

たっぷりと時間を置いて、少女は目を開いた。それから、ゆっくりと自分の名前を告げた。

「私は1ーAの、長月楓よ」

ながつきかえで

1101 サボタージュ（後書き）

初投稿です。更新は不定期ですが、なるべく早くに更新しようと思っ
ています。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675w/>

魔法士の卵

2011年10月9日15時34分発行